

# 「社會的成層」について

坂 田 太 郎

近頃手にした敗戦後のドイツ社會學會大會の議事録 (Verhandlungen des Achten Deutschen Soziologentages vom 19. bis 21. September 1946 in Frankfurt a. M., Vorträge und Diskussionen in der Hauptversammlung und in den Sitzungen der Untergruppen, Tübingen, 1948.) は、色々な點に興味深く思ったが、とくに關心を寄せざるを得なかつたものとして、ザウermannの「社會的轉層」(Soziale Umschichtung) というの報告と、それをめぐつての諸家の討論とがある。<sup>(1)</sup> 報告の趣旨は、戦後における社會的轉層の地盤としてのドイツ人口の年齢構成ならびに職業的・社會的組成の著しい變化を、同國における經濟的・社會的及び精神的・政治的事態の推移とからな合せてあきらかにすることにあつたと思われ<sup>(2)</sup>る。

(1) H. Sauerermann: Die soziale Umschichtung, op. cit. SS. 93 et sqq.

(2) 同じ問題をめぐると具體的にならば、H. Becker: Changes in the Social Stratification of Contemporary Germany, American Sociological Review, vol. 15, no. 3, (Jun. 1950), pp. 333—42.

「社會的成層」について

その内容の詳細はともかくとして、一方に男子有業者の著しい減少、とくに若い年齢層の労働力の供給と壯老年層の労働力のそれとの間に著しい不均衡があり、したがって社会的諸集團相互の比重に大きな變化をきたしたことや、他方そのことと關聯して資本形成に大きな障礙のあること等の問題に觸れながら、生活の物質的諸條件が單に生産諸力の量によつてきまるものでなく、生産諸力相互間の關係によつて規定されることを述べ、それゆえにもし社會(階級)問題を高く所有の分化々々の面で捉えるに止つて、それを社會的轉層の問題として擷む用意を缺くならば、問題の意義をあまりにかたつかみとることができなくならうし、そして經濟的・社會的成層(Schichtung, Stratification)の問題ととり組むには、所有ならびに所得の分化でなく、それぞれのものの使用の仕方如何が中心的な意義をもつことを説いたりしている點が興味を惹く。(1)

(1) Saemann: op. cit. S. 102.

ドイツで産業社會における人口の職業的・社會的組成の實證的な研究に手を染めたのはゲンロン(W. Gerloff: Veränderungen der Bevölkerungsgliederung in der kapitalistischen Wirtschaft, Heft 249/50 „der Volkswirtschaftlichen Zeitschriften“, Halle a. S., 1910.)だとされるが、われわれがよく知れているのは、ノイマンの一九一一年の著書(G. Neuhaus: Die berufliche und soziale Gliederung des deutschen Volkes, die deutsche Volkswirtschaft und ihre Wandlungen im letzten Vierteljahrhundert, Bd. I. 1911.)と『社會經濟學綱要』第九卷第一分冊で收められた同じ著者の研究(Neuhaus: Die berufliche und soziale Gliederung der Bevölkerung im Zeitalter des Kapitalismus, Grundriss der Sozialökonomik, IX. Abt. Das soziale System des Kapitalismus, Leipzig, 1911.)である。

talismus, I. Teil, Die gesellschaftliche Schichtung im Kapitalismus, Tübingen, 1926, SS. 360 et seq.) である。ところでこの『綱要』の當該分冊は、資本主義社會の轉形に關するブリンクマンの論稿をはじめとして、近代資本主義社會における諸階級の理論的、歴史的ならびに實證的研究を旨とする諸家の論稿(3)を収めているのであるが、その總括的なタイトルが『資本主義における社會的成層』となつてゐることに注意したい。ここで階級の問題をあらためて「成層」の問題としてとり上げ、從來はたゞ日常的な意味で用いられるにすぎなかつたこの言葉をタイトルとしたのは、おそらく、たゞ階級の理論的、歴史的ならびに實證的研究をそれによつて總括するという便宜的な意味からではなく、實質的には既にソンバルト等の先蹤があるが、階級の所在を或は歴史的・構造的な視野から、或は實證的な、とくに統計的乃至人口學的資料によつて検討し、階級を社會的・經濟的組成の問題として具象的に擲んでゆく含みをもつて見たと見るべきではなからうか。

(1) Sauermann: op. cit. S. 100. 併しこの頃には、同種の研究がノイハウスのものを含めつつかなり出づる。例えば Vander Bort: Beruf, gesellschaftliche Gliederung im deutschen Reiche, Leipzig, 1910. Böhmert: Wandlung der deutschen Volkswirtschaft 1882 bis 1907, ein Blick auf die Ergebnisse der Berufs- und Betriebszählungen, „Arbeiterfreund“ Heft 13, 1910. Hesse: Berufliche und soziale Gliederung im deutschen Reiche, Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik, 1910. Hitze: Einige interessante Ergebnisse der Berufs- und Betriebszählung von 1907, „Soziale Kultur“, 1910. Zahn: Deutschlands Entwicklung unter besonderer Berücksichtigung der Volkszählung von 1905 sowie der Berufs- und Betriebszählung von 1907, Annalen des deutschen Reiches für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft, Heft 6—9, 1910. ならんか。 Mendelssohn: Die Entwicklungsrichtungen der deutschen

「社會的成層」について

Volkswirtschaft, Leipzig, 1913. W. Sombart: Die deutsche Volkswirtschaft im 19. Jahrhundert und im Anfang des 20. Jahrhunderts, Berlin, 1912. v. v. v. Kapitel XVI Beruf und Besitz 445 Kapitel XVII Die sozialen Klassen 483.

(2) これにはしぎの邦譯がある。大日本文明協會編、獨逸の職業組織、大正七年。

(3) C. Brinkmann: Die Umformung der kapitalistischen Gesellschaft in geschichtlicher Darstellung. Id.: Die Aristokratie im kapitalistischen Zeitalter. G. Albrecht: Das deutsche Barientum im Zeitalter des Kapitalismus. L. P. Pest: Mittelstandsfragen, der gewerbliche und kaufmännische Mittelstand. E. Lederer und J. Marschak: Der neue Mittelstand. G. Briefs: Das gewerbliche Proletariat. R. Michels: Psychologie der antikapitalistischen Massenbewegungen.

(4) Sombart: Die deutsche Wirtschaft im 19. Jahrhundert, 1903. Id.: Das moderne Proletariat, 1906.

一九一〇年代以降における人口の職業的・社會的組成の實證的な研究の續出の有力な機縁の一つとなつたものが、一九〇七年に行われた職業及び經營調査であることは想像に難くないが、ドイツにおける階級理論の展開の輪郭を知るものにとつては、この問題があらためて「成層」の問題としてとり上げられ、統計的資料によつてこの問題を檢證する機運が生れたことは、たゞかゝる資料が利用しやすくなつたからという理由にのみとづくとは考えられない。<sup>(2)</sup>事實同國におけるこの種の調査だけに限つても、この年度以前において既に二回（一八八二年及び一八九五年）行われてきているからである。<sup>(3)</sup>十八、九世紀から二十世紀のはじめにかけて、理論的な展開を見てきた社會科學におけるこの重要な事態の研究に、一九二〇年代に至つて、何故このような新らしい探求の方向が特に加つてきたかは、不勉

強な筆者には未だに充分つきとめられないことからののであるが、おそろしく、同じ社會科學上の他の重要な概念と等しく、この概念もまた實踐的な或は經驗的な檢證を餘儀なくされるに至つたいきさつがあるのではないかという氣がしてならぬ。

(1) ドイツにおける階級理論の展開の概観のためには、下記の文獻が参考となる。O. Spann: „Klasse und Stand“, Handwörterbuch der Staatswissenschaften, 4. Aufl. Bd. V, Jena, 1923. F. Tönnies: „Stände und Klassen“, Handwörterbuch der Soziologie, hrsg. von Vierkandt, IV. Lieferung, Stuttgart, 1931. P. Mombert: Zum Wesen der sozialen Klasse, Hauptprobleme der Soziologie, Erinnerungsgabe für Max Weber, II. Bd., München u. Leipzig, 1923.

(2) ガイダルにあつては、階級が時代的に制約されてのみ存することが指摘せられ、マルクスマスから、古代社會の階級がその構造から見ても、中世社會や近代社會のそれとは異つてあらわれることに觸れたこと等を參照し、この概念をこびりつく一切のものを洗い落してそれを一般化しようとする從來の試みよりも、一つの普遍的な上位概念(社會的階層 Soziale Schicht)を創出することの方が正しいという見解が述べられている。この階層概念が彼にあつては、特定の人口集團と對應するものとして擧げられていることは後述の如くである。『社會の権造性格を規定するこの種の人口部分の最も近い親族 (genus proximum) として、自分は「社會的階層」の概念を拮定する。』T. Geiger: Zur Theorie des Klassenbegriffs und der proletarischen Klasse, Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich, 54 Jahrg. 1. Heft, (1930) SS. 186 et seq.

(3) 拙稿「ドイツ職業統計の一考察」山口大學經濟研究所報、第一卷第一號、參照。

もとより階級は、弘通の意味での「集團」ではないであらう。何故ならそれは、部族や家族や宗派や組合や、別して身分やカスト等と同じ仕方において存在するのではないからである。それは客觀的に同じ状態にあるところのもの

「社會的成層」について

が共同の「意識」によつて結びつけられてはじめて、「向自的階級」(Klasse für sich)<sup>(1)</sup>としてそれ自身を具象化する  
と云えるにしても、なにかこれ等の集團とは異つた集合體 (Kollektiv) としてのあり方をもつてゐる。かゝる集合  
體の可能としての客觀的狀態が「即自的階級」(Klasse an sich)と云われるものであるものであり、また「階級狀態」  
(Klassenlage)<sup>(2)</sup>と名づけられたりすることのあるのは、周知のとおりであらう。したがつて階級は、コックス等の  
云うごとく、本來概念上の階層 (Conceptual Stratum) と見られても止むを得ない面をもつてあり、それゆえにカ  
スト (Kaste, Caste) を身分 (Stand, Estate) と同じ意味及び同じ仕方では「組織化されつゝなう」ことをその特徴  
とするように見える。<sup>(3)</sup>併しそうだからとつて、それが單なる概念上の作業假説 (Arbeitshypothese) にすぎなかつ  
たり、單なる分類概念であつたりするのではないであらう。作業假説や分類概念にしても、それ等がもともと實在の  
側に對應するものをもち、それを映しているのだから、假説や概念としての效果すら完全に收めることができな  
い筈であらう。<sup>(4)</sup>階級が身分やカストと異つたあり方をもつのは、元來前者が後者とは違つて、資本主義的生産様式を  
基軸とする「開いた社會」を基礎として成り立つことにもとづくのである。

(1) Cf. Marx: Das Elend der Philosophie, deutsch von Bernstein u. Kautsky, Berlin u. Stuttgart, 1923, S. 162.

(2) M. Weber: Wirtschaft und Gesellschaft, G. d. S., III. Abt., Tübingen, 1922, SS. 177, 632.

(3) O. C. Cox: Caste, Class and Race, a Study in Social Dynamics, N. Y., 1948, p. 301.

(4) ヴロムが階級概念の論理的分析は、經驗的ミームの適用によつて檢證されなければならぬことを力説したり、「實體  
概念」(Substantive Usage) と「分類概念」(Classificatory Usage) とを區別したりしているのは興味を誘うが、これ等の  
概念の間係はたゞ分析的に擱まれるだけに止つて、それぞれのものが如何なる對象に對應するか明瞭な認識が缺けてゐる嫌

いがある。彼の云う實體概念は、もともと封鎖的な集團にしか當てはまらないのだし、分類概念は、解放的な集合體を捉えることをその建前とするべきもののあることが窺われなくてはならぬ。L. Gross: The Use of Class Concepts in Sociological Research, American Journal of Sociology, vol. LIV, no. 5, (Mar. 1949), pp. 409 et seqq.

もしそうだとするならば、階級の所在を實證的な特に統計のないし人口學的資料によつて検討し、それを資本主義的體制のもとにおける社會的・經濟的組成の問題として擷むという着想は、その狙いが先ず階級状態の闡明を前提とし、それをいくつかの人口諸部分の組成に照らし合せ、その組成を再構成すると同時に、逆に組成自體の法則によつて「階級状態」の調整をこころみようとするものである限り、即ちかような手續きにおいてそれを正しい意味における作業假説としようとするものである限り、甚だ有意義であることは否み得ない。但しわれわれは、生産諸力の相互關係としての諸階級が、概念上の階層であるという風に思いすごしているために、「階級状態」を絶對化してかゝるばかりか、集合體としての「階級」をも動きのとれぬものとして固定する罣に落ちこみやすい。かような絶對化は、その反面では、統計的に弾きだされた何等かの人口諸部分の關係を、やすやすと階級の實相と見誤つてしまふ過誤にみちびくのである。しかるにこの兩者は、少くとも理論的には、一應問題の地平を異にしていることが認められなくてはならない。これ等のことを考え併せてこゝに當然想起されてよいのが、上述の『綱要』の後に出了たガイゲルの『成層論』(T. Geiger: Die soziale Schichtung des deutschen Volkes, Soziologische Gegenwartfragen, I, Heft, Stuttgart, 1932.)<sup>(1)</sup>である。

7  
(1) もちろんわれわれはまた、フライエルにおけるが如き「成層」概念のとり扱いをも知つてゐる。社會生活の歴史的な構成「社會的成層」について

原理が、一定の「段階」に位置づけられ、歴史的に飽和されうものであると同時に、如何なる社會的現實の構造要素ともなつてこの現實のうちに成層化される (eingeschichtet) というのが彼の『現實科學としての社會學』の體系的歸結であるが、(„Schichten und Stufen der gesellschaftlichen Wirklichkeit“) それと共に彼は、「社會の辯證法」について語りつゝもるもるの部分社會が相互に重層關係にある (überschichtet) 事態等にも觸れている。併し彼の著作では、『構造概念を歴史的に飽和』させること、況して『社會學的範疇を用いて社會的現實をうらぬくことは、斷念』されているのである。H. Freyer: Soziologie als Wirklichkeitswissenschaft, Tübingen, 1930. III. Kapitel, Grundlinien des Systems. 福武直譯、現實科學としての社會學、第三章、社會學體系の綱要。

彼は階級に二つの語義を區別する。その一つは、互いに分化する單位(人間)の總體(人口)から出發して、單位としての人間が特定の徵表ないしその系列を基として分類される場合であり、したがつて階級とは、一つの定型をあらわす人間の總括を意味する。しかるに他の一つは集合體としての階級を指す場合であつて、それは人口から出發するのではなく、人口がその基體をなしている社會的生活過程から出發する。この生活過程には、諸種の相對立する力がある。いはいて特定の構造を形づくつているのであるが、これ等の力、意志の傾向の擔持者としての人間集團が第二の意味における階級である。即ちそれはそのものとして、特定の志向を有する社會的構成體を指す、と云われる。<sup>(1)</sup>ところが第一の語義はたゞちに人口部分 (Bevölkerungsteil) とする言葉に置き換えられる。こゝに諸部分の分類の徵表とされるものは、或は所得の額や種類であつたり、生産手段への參與の程度やその仕方、經濟的活動の種類、經濟的地位の序列等々であつたりする。が重要なことは、この人口諸部分が可測量であることである。しかるに經濟生活の構造を形づくる特定の經濟的利害や心性 (Mentalität) をあらわす人間の集合體は、これと同じ仕方では測定不可能

である。何故というにそれは全く、または精々部分的にしか、組織されていないからである。ガイゲルの云う「階層」とは、實はかゝる集合體に付せられた名であるに他ならない。かくして兩義の階級は、そのまゝ人口部分と階層との關係に切り替えられるのであるが、それにも拘らずなお、人間が生産手段に對しても特殊の關係(生産關係)をあらわす階層が、とくに(經濟的・社會的)階級と稱ばれ、階級概念が特にこのものために留保されていることは注意されてよ<sup>(2)</sup>。

(1) Geiger: op. cit., S. 2.

(2) この階級は、それが經濟的發展の決定的な力となり、それ等の抗争がたゞに現代に特有の極印を捺しつけるばかりでなく、一つの歴史的宿命であり、その經過が經濟社會の將來の布置を決定するが如きものである場合には、「經濟社會學的・歴史的意味の階級」と稱ばれ、またこれに對して社會構造が經濟生活以外の他の意味領域から眺められるときは、教養的階層とか政治的階層とか云うものが析出せられ(「特殊社會學的階層概念」)、さらに或る領域にその根源を有する階層が、そこから他を光被し、他の活動體系の社會化に照入し、かくして社會化の基礎的様式として全體の社會構造を滲透するに至る場合が、階層又は階級の「普通社會學的概念」の内實をなすのである。Ibid., S. 7.

ガイゲルはかように人口部分と階層との關係を見定めた上で、階層の心性を前者のうちに位置づけること(Loka-Isierung)を企てる。即ちいくつかの人口部分が特定の階層(というよりもこゝではすでに集合體としてのそれではなくて、特定の志向又は行爲の定型としてのそれにその意味が翻轉する)の定型的な生成または動員の場(Bekunf-erungsfeld)と見られるわけである。かくて人口部分と階層とは、心理的な動機づけ(Motivation)の關係によつて橋渡しされ、『定型的な(厳密ではないが)對應の關係』に置かれることになる。經驗は客觀的に捕捉しうる徵表

「社會的成層」について

を具えた人間定型が、一つの階層のうちに主として代表されることを明らかにすると同時に、かゝる定型を代表するものが主としてこの階層に傾く (zuneigen) ことを推量させる、と彼は云う。<sup>(2)</sup>ここに特定の人口部分にとつて定型的な状態(例えば職業上の地位)と一定の階層の目指す志向又は行爲の定型との間をつなぐ理解しうべき心理學的動機聯關の糸がたぐり出されるのである。したがつてこの手續きは、一種の動機づけ聯關による理解であるのであり、マックス・ウェーベルの「理解社會學」における「説明的理解」(erklärendes Verstehen)とよりむしろ定型的行爲の正しい因果的意味解明 ('richtige kausale Deutung') または「理解しうべき行爲定型」(verständlicher Handlungstypus) の設定<sup>(3)</sup>をその方法的基礎としてゐることが明らかである。

(1) Geiger: op. cit., S. 5.

(2) Id.: op. cit., S. 12.

(3) M. Weber: Wirtschaft und Gesellschaft, G. d. S., III. Abt., Tübingen, 1922, SS. 4, 5. 拙譯、社會學的方法的原理、一四頁以下。

ところで彼の企てる因果的意味解明のためには、特定の階層または階級のあらゆる定型的な志向、心性、行爲の擔持者が、何等かの意味で可測的であるのでなければならぬ。しかるに階層もしくは階級そのものは、彼にしたがえば、可測的でない。測定に堪えるのは、これ等の階層に所屬する人々の生成の場としての人口部分のみである。換言すれば特定の行爲又は態度を代表するものの量的把住が、もともと統計的接近を許さぬまたはそれに不適切であるがゆえに、特定の徴表に従つて選ばれ、且つ一定の行爲定型に豫定された (prädestiniert) ・人口集團の統計的把握を

通じての接近が企てられるより他に途がないのである。かくして統計的方法によつて算定された人口範囲が、それに對應する階層の擴散の機會をあらわすことになる。例えば社會的意志の方向としてのプロレタリア社會主義は、必ずしも賃銀労働者の定型的状態から直ちに出てくるとは考えられない。併しかゝる志向定型は、理解しうべき心理學的動機聯關の意味において、この人口部分に適合的 (adäquat) であるといふのである。<sup>(1)</sup>

(1) Geiger: op. cit., SS. 12, 13.

しかしながらそれは云つても、階層と人口部分との粗笨な結びつきは、あくまでも避けなくてはならない。その目的のためには、集團徴表を精細に分化させる (Tiefendifferenzierung) とともに、統計的把握の對象をできるだけ細分して、精確な對應の實をあげるような算定方法をそれと結びつけることが肝要となる。<sup>(1)</sup> その場合彼が主たる資料としているのは一九二五年の職業統計であり、その中の職業上の地位 (Stellung im Beruf) についてのデータを手懸りとし、いわゆる上からの方法 (subsumierendes Verfahren) でなく下からの方法 (aszendierendes Verfahren) をとることによつて、人口集團の限界領域、中間領域のとり扱いにも能う限りの精確さをもたせると同時に、尺度としての階級状態を、どこまでも正しい作業假説の意味において驅使してゆこうとするのである。

(1) Geiger: op. cit., S. 14.

彼のとつた方法とそこに示された業績との立ち入つた検討は、いまはその場所でない。たゞ問題としたいのは、最近のアメリカにおける成層論の盛行が、上に見たようなドイツにおける成層論の方向ならびに性格と、果してどの程度の関係をもつのか或はまたないのかということである。筆者はアメリカの學界においても、學術上の用語としては

「社會的成層」について

殆ど用いられることのなかつた成層概念が、近來頻繁に用いられている事實に興味を惹かれる<sup>(1)</sup>。しかし最近においてはつきりこれを術語としてとり上げ注目を惹きつゝるパーソンズ (T. Parsons An Analytical Approach to the Theory of Social Stratification, A. J. S., vol. XLV, no. 6 (May 1940), pp. 841—862.) をキーンズ・ノー・サーク (Kingsley Davis: A Conceptual Analysis of Stratification, A. S. R. Jun. 1942. K. Davis and W. E. Moore: Some Principles of Stratification, A. S. R. Apr. 1945, now reprinted in L. Wilson and W. L. Kolb: Sociological Analysis, N. Y. 1949. K. Davis: Human Society, N. Y. 1949, Chap. XIV.) とせらるゝもの<sup>(2)</sup> 的な研究の方向と性格とは、殆どその痕跡を留めていない。ことにパーソンズはよく知られているように、ヨーロッパ社會學の咀嚼に優れた感覺と才能とを示している人だけに、例えば彼とガイデルとの間に、少くとも若干の課題の共通性が憶測されぬではなかつた。しかるにこの兩者は、それぞれが多少ともウェーベルの影響をうけているといふ<sup>(3)</sup> ことその他には、何等課題の共通を示すこともなければ、操作の類縁を感じさせもしないのである。それどころか却つて、課題と操作との性格の相違が、二つの國における學問的環境の差異を、われわれにつよく感じさせずにはいないほどであるのである。

(1) 山口大學のマイヌ博士は、術語としての使用が、パーソンズに遡りうるものはないかと云われたが、その著 R. E. Park and E. W. Burgess: Introduction to the Science of Sociology, Chicago, 1921. の序文にはそれを見出すことができた。筆者が個目した最初のものは、ロシアから移住したドイツ社會學にも造詣の深いソロキンの著 P. Sorokin: Contemporary Sociological Theories, N. Y. and London, 1928, pp. 483—7, 749. である。その著 Social Mobility, 1927. 年 4 月 5 日

cisty, Culture and Personality, 1947. において使用されていることは想像に難くないが、脱稿までにたしかめることができなかった。但し前者には注目すべき成層の定義の下されていることが、他書における引用によつて判る。『社會的成層とは、階層的に重なり合つた諸階級への所與の人口の分化を意味する。』(傍點引用者。R. Centers: The Psychology of Social Classes, Princeton, 1949, pp. 12—13.) の定義にははつきりと、ドイツ的な問題提出とのつながりが感じられる。

(2) パースンズにあつては、社會的成層とは、與えられた社會組織を構成する個人々の分化した序列 (Differential Ranking) であり、社會的に重要な點で、彼等が相互に附する優劣である。Ibid., p. 841. であるからアメリカでは、多くの場合それを階級 (Class, Social Class) と云ひ、階級 (Stratum) と云ひ、地位 (Status, Social Status) と云ひ、その意味に大差はないのであつて、たゞ成層といふときは、概して、社會における諸階級の分化を指すことに注意すればよい。(ゆえにこの分化、ならびに分化したものの組成という點で、若干ドイツ流の Schichtung とつながる點がある、と云えば云える。) フェアチャイルドを抜くと、成層とは階級、カスト、地位等への社會の水平的な區分であり、社會的成層とは、社會の成員を異つた水準の集團に配列することを指す、とある。H. P. Fairchild: Dictionary of Sociology, N. Y., 1944, pp. 293, 308.

(3) 両者が同じようにウェーネルの影響をうけているといつても、彼等の銘々がウェーネルから受け容れているもの及びその受け容れ方は、異つてゐる。既述のようにガイゲルにあつては、志向もしくは行爲の定型としての階層とその擔持者である特定の人口部分との間の動機づけ聯關の設定を、ウェーネルの因果的意味解明 (kausale Deutung) の方法に依據させるところにその影響が見られる。しかるにパースンズの論文の趣旨は、道德的評價が社會組織における行動の最も重要な側面であることとを説き、したがつて序列決定の中心的な規準としての道德的評價の意義を強調するところにあるのであり、その點からウェーネルの彼に對する影響は、彼の「社會行動の理論」を通じての間接的なものであることに注意を要する。ウェーネルの「階級理論」そのもののヤレ内容的な影響は、却つてマンハイムの紹介者として知られるシムズ等に見られるのである。 Cf. H. Goldhamer and E. A. Shils: Types of Power and Status, A. J. S., vol. XLV, no. 2, (Sep. 1939), pp. 171—182.

#### 「社會的成層」について

## 二

アメリカにおいて従来は色々な理由から閑却されていた階級の研究<sup>(1)</sup>が勃然と起つてきたのは、一九三〇年代に至つてからであると云われる。かゝる傾向を惹き起した根本的な原因は、一九二九年ニュー・ヨークにおける株式恐慌を契機として世界中をおし包んだ未曾有の經濟恐慌によつて「永遠の繁榮」の信仰がゆすぶられ、千數百萬に及ぶ失業者を街頭に投げだすに至つて劃期的な旋回を餘儀なくされたアメリカ資本主義の自省であつた。併しニュー・ディールの施行も事態の根本的な回復とはならず、資本主義體制の一般的危機或は「經濟的成熟」(Economic Maturity)の認識をいよいよ強いられると共に、他方ニュー・ディールの一環として労働者に與えられた團結權その他の法認は、彼等の組織化を促進し、彼等自身のうちにその地位の自覺を喚び起すに至つて階級的對立は明瞭な事實となり、この問題に社會科學者も眼を蔽うことができなくなつた、といふのである。<sup>(1)</sup>

- (1) M. M. Gordon: *Social Class in American Sociology*, A. J. S., vol. LV, no. 3, (Nov. 1949), p. 264. 杉政孝「アメリカ社會學における階級研究」『思想』第三三一號、九一頁以下。尙 E. A. Shils: *The Present State of American Sociology*, Glencoe, Illinois, 1948. も同じ問題に觸れているらしいが参照できなかつた。但しこれはつぎの紹介がある。武田良三「アメリカ社會學の現状とその反省」『社會學評論』I、一〇九頁以下。

階級問題への關心の發生は、ゴードンによると、先ずシカゴ大學から芽を吹いた生態學派<sup>(1)</sup>のモノグラフやヨーロッパから移住したソロキンの社會變動に関する著作 (Sorokin: op. cit.) のうちにあらわれたが、一九二九年にははつ

きりと階級に焦點を定めたりンド夫妻のアメリカ中西部コミュニティの社會人類學的研究が刊行され、(Robert S. and Helen M. Lynds: *Middletown, a Study in Contemporary Culture*, 1929.) 三十年代になるにチャーターが既にその助手たちとニュー・イングランド・コミュニティの分析のための資料の蒐集をはじめていた。と共にウォーナー等のチャープ・サウス・コミュニティ研究の鳥瞰は一九三六年に公表されたが(W. Lloyd Warner: *American Caste and Class*, A. J. S. vol. XLII, no. 2.) 翌三十七年にはリンズ夫妻の研究の續卷(*Ibid.*: *Middletown in Transition*, 1937.) やドラーの著作(Dollard: *Caste and Class in a South Town*, 1937.) なども一九四一年に至つてニュー・イングランドの一都市を對象とするウォーナー等の尤大な研究叢書の第一卷(W. Lloyd Warner and Paul S. Lunt: *The Social Life of a Modern Community, the Yankee City Series*, vol. I, 1941.) などの研究サークルに屬するプリズン・チャープ・ガードナー夫妻等のチャープ・サウス・コミュニティ研究のモノグラフ(Allison Davis, Barleigh B. and Mary R. Gardner: *Deep South, a Social Anthropological Study of Caste and Class*, 1941.) が公刊を見るに至つたのである。<sup>(2)</sup>

- (1) 生態學と地理學 J. A. Quinn: *Topical Summary of Current Literature on Human Ecology*, A. J. S. vol. XLVI, No. 2. (Sep. 1940) pp. 191-226. 早瀬利雄『社會生態學の基本問題』『季刊社會學』3, を見よ。  
(2) cf. Gordon: *op. cit.*

ところでこのような階級研究の機運の盛り上りに見られる著しい特徴は、その研究方法において劃然と文化人類學的に、ないし社會人類學的に、方向づけられている點である。<sup>(1)</sup> 併し文化人類學風に方向づけられているのは、敢て階

「社會的成層」について

級研究に限らないのである。アメリカ社會學と文化人類學ないし社會人類學とは、少くとも方法の上では、同じパースペクティブによつて滲透されている。したがつてその點からの區別は不可能である、というよりも不適切である、といった方がよい。文化人類學とは未開（又は異質）文化の社會學であるし、社會學とは現代社會の文化人類學であるのである。<sup>(2)</sup>このように見てくると、われわれとしても、一應文化人類學の性格を不問に附しておくわけに行かない。

(1) 文化人類學と社會人類學とは、殆ど同義語として用いられている場合が多い。併し専門家から見れば問題はありそうである。つぎの文献を参照。鈴木二郎、社會人類學、東京社會科學研究所編『文化の社會學』、四六頁以下。石田英一郎、歴史科學としての民俗學と民族學、『人文』第二卷第一號。C. Kluckhohn: Some Remarks on the Branches of Anthropology and on Anthropology's Relation to Other Disciplines, the Central States Bulletin of A. A. A., vol. I, no. 1, (Nov. 1947).

江實譯、人類學の諸分野、『季刊民族學研究』第一四卷第一號。

(2) T. Parsons and B. Barber: Sociology, 1941-46, A. J. S., vol. LIII, no. 4 (Jan. 1948), p. 247. これはつぎの抄譯がある、パースンズ・バーバー、アメリカ社會學、『思想』第二九〇號。

この學問の古典的立場は、人の知る如く進化論者によつて代表された。それは人間文化の形成が、場所を異にしなから同一の方向を辿つて發展するそれぞれ獨立の進化過程を踏むと考えるのであるが、原始社會に關する資料の乏しさ、殊にこれ等の資料における平面性と歴史性の深さの缺如とが、容易に諸資料のかような擬歴史的配列に誘つた事情は、周知のことがらに屬している。<sup>(1)</sup>これにとつて替つてあらわれた傳播説 (Diffusionism) は、明瞭に進化論の否定をその建前とする。進化論に従えば、最初の起源こそは一つの文化またはその文化のいずれかの部分の成長を決定

する種子であり、そのうちに全文化過程が豫定されて潜在するのになければならなかつた。しかるに反進化論者にとつては、唯一の起源はたゞ偶然の出来事にすぎず、諸多の起源が多く、発展の近道に他ならなかつた。<sup>(2)</sup> 器具や武器、信仰や傳説、社會組織や裝飾技法の類似性が、この立場にあつては、一つまたは數個の起源からの傳播によつて説明されるのである。

(1) A. Goldenweiser: *Cultural Anthropology, the History and Prospects of the Social Sciences*, ed. H. E. Barnes, N. Y., 1925, p. 221. 米林富男譯、文化人類學入門、三五頁。

(2) *Id.*: op. cit., p. 227. 邦譯、四五頁。

併し類似性の事實は、心理學的側面から見ると、想像される程『内からの』文化的發展の過程と異つていない。傳播はゴールドンワイザーにあつては、機械的な移轉でなく、その本質において心理學的なプロセスと解せられるのである。<sup>(1)</sup> 傳播説はふつう歴史學派のうちにふくめられるが、この學派に屬しながら彼は進化論に對して批判的であると同時に、傳播説に對しても批判的である。<sup>(2)</sup> 彼の言をもつてすればこの學派の特色は、執拗に「地理的・歴史的事實」と取り組み、どこ迄も思辨を排し、明確な證據をもととして歴史の再構成を行ふ點にあるのでなければならぬ。<sup>(2)</sup> ところで地理的・歴史的事實と取り組むとは、調査を限られた地理的・歴史的区域に集中し、この区域の年代誌の深さと部族間の接觸によるその横斷的・地理的擴がりとを明らかにすることを意味するのであるが、こゝに重要な意味をもつのが文化圏 (Culture Area) の概念である。文化圏とは、文化の種々の要素が組み合されて一つの統一を形づくるとき、その内容においてもまた凝集の度合においても、地理的區域を異にするにつれて異つた事態があらわれるこ

「社會的成層」について

とを指すのである。<sup>(2)</sup>この事實にウィスラーは古典的表現を與えた。即ち彼によると文化圏とは、『人間の社會的行動の地域的性格のあらわれ』<sup>(4)</sup>であるのである。

(1) Goldenweiser: Diffusionism and the American School of Historical Ethnology, A. J. S., vol. XXXI, no. 1, (Jul. 1925) p. 31.

(2) Id.: op. cit., p. 38.

(3) Id.: op. cit., p. 35.

(4) C. Wissler: The Culture Area Concept in Social Anthropology, A. J. S., vol. XXXII, no. 6, (May 1927) p. 891.

併しこの學派でも、たゞ特定の區域における歴史の再構成を企てようとするのがその趣旨のすべてではない。即ちそれと同時に諸文化をその類同を目安として整理し、諸文化の個性を却つて或る一般化のプロセスを通じて具象的に擷もうとする。この場合に用いられるのが様式 (Style) をよび型相 (Pattern) の概念である。様式とは人間の行動が、つねに部族の支配的な型相によつて制限されるところに認められ、型相とは、文化を形づくる素型 (Trait) またはその複合體が、組み合され配置された状態 (Configuration) を指すのである。いわゆる「機能學派」も、その方向においては歴史學派と異つていない。たゞ前者にあつては、マリノウスキーに見られる如く、文化またはそれを形づくるいちいちの要素が、「基本的な人間の欲求に對する回答」<sup>(1)</sup>である點に關心が集められ、これ等諸機能のつくり出す相互的な作用聯關そのものが、とりも直さず獨自の全體であると解せられる點が特徴的であるのである。そして諸々の生活領域の密接な連繫と相互依存とを明らかにすることによつて、普遍妥當的な規則 (「法則」) に到達すること

を狙うといわれるが、かゝる狙いの方法的意義は、必ずしも分明であるとは云えない。

(1) W. Milke: Die historische Richtung in der Völkerkunde, Schm. Jahrb., 61. Jahrg. Heft 4, S. 1. 及川宏譯、民族學、學說・展望、二頁。

マリノウスキーによれば、社會人類學または文化人類學とは、原始的部族または民族の文化ならびに社會組織を研究するものであるが、その特色は發展のあらゆる水準における人類學的事實の機能の・これ等の事實が文化の積分的體系の中で演じる役割の・それ等が體系の中で相互に關係し合つてゐる様式の・且つこの體系が物理的環境と如何なる關係にあるかの・説明を指すものである。したがつて文化の機能的見解は、如何なるタイプの文化にあつても、風習や物的對象や觀念や信仰が、基本的な人間の欲求に對する反應として重要な役割を果し、何等かの達成すべき職務をもつており、動く全體の中で缺き得ぬ部署を擔當するという原則を措定する。この見解はそれゆゑに、單に文化の動的な性質を主張するのみでなく、その有機的な統一を重視するのである。しかもこの有機的統一は獨自の過程、または獨自の存在と稱ばれ、獨特の方法で研究されねばならぬとされる。『文化は獨自の實在 (Reality sui generis) であり、かゝるものとして研究されなくてはならぬ』<sup>(2)</sup>

(1) B. Malinowski: Art. Social Anthropology, Encyclopaedia Britannica, 14th ed. (1929) vol. 20, p. 864.

(2) Id.: Art. Culture, Encyclopaedia of Social Sciences, vol. IV, p. 623.

この機能的見地に對しての歴史學派からの批判等はこの際觸れずにおくこととして、こゝで問題となるのは、文化人類學者にとつては、作用聯關が獨自の全體として與えられてゐることである。個々の部分は特定の欲求に對する回

「社會的成層」について

答としての特定の機能を擔當することによつて、全體に對した他の諸部分に對し相互依存的な有機的關係に立つ。かくて機能主義とは、目的論的考察の經驗的使用に他ならず、且つ著しくオルガノロギー的性格を露呈する。のみならず注意すべきことは、この全體がすぐれて積分的體系である點である。即ち全體は異質的な器官の分化した機能の相關の上に立つというよりも、むしろ同質的な成員の同質的な行動の組織であるのである。というのは未開社會という集合體の成立を可能ならしめる條件の一つが、『社會組織の單位としてはたらく小集團の内部における(個々の成員の)反應の同一(Sameness of Reaction)』にあるからである。<sup>(1)</sup>

- (1) Cf. Milke: Der Funktionalismus in der Völkerkunde, Schm. Jahrb. 61. Jahrg. Heft 5, Ss. 19 et seqq. Id.: Die Lehre von der Kulturstilen in der Völkerkunde, Schm. Jahrb. 62. Jahrg. Heft 1, S. 66. 邦譯六八頁以下、七四—五頁。
- (2) Malinowski: op. cit. p. 623.

レッドフィールドの言葉を藉りれば、未開社會の文化とは『自足的、繼續的且つ完全な社會のすべての成員が、それに加わるところの・且つ個々人が生れ落ちてから死に至るまで及び共同體が幾世代を経ても變らずその一切の反覆する必要にとつて適切な・生活の組織された傳統的な仕方』を指すのである。<sup>(1)</sup>したがつて人類學者はしばしば、「共同體」とか「社會」とか「文化」とかの言葉を互換的なものとして使用し、その間の區別をしない。それというものも、未開社會にあつて共に生活する人々の集團は、文化と稱ばれる共同の「親和」を頗ち合う同じ人々であるからである。<sup>(1)</sup>それゆゑにこそ一人の成年者の知るところは他の成年者の知るところとほぼ同じ内容であり、そこにほんの一つのケースから、全社會について多くのことを摺みとる可能性も生じてくるのである。<sup>(2)</sup>

(1) R. Redfield: *The Folk Society and Culture*, A. J. S. vol. XLV, no. 5, (Mar. 1940) p. 739.

(2) *Id.*: *op. cit.*, p. 740.

したがつてかような社會の調査に當つては、如何に標本を抽出するか (Sampling) などの問題は重要性をもたない。どころか殆ど無視されてよいし、又は少くとも常識的にことを處理したゞけで済ますことができる。<sup>(1)</sup>一般に人類學的調査に當つて、調査對象たる共同生活に直接個人的に參與することの重要性が認められたりするものも、<sup>(2)</sup>かようにして若干の成員を直接によく知ることが、成果を擧げるための効果ある途であるからである。併し近代社會に比べてその組成が極めて單純であり、且つその成員が同質的である未開社會を對象とするかゝる地域的研究の方法が、その儘複雑な組織をもち、成員間の分化の甚だしい近代社會に當てはめられるであろうか。パースンス等の云う如く、本來は文字をもたない (Nonliterate) 民族を研究の對象とする文化人類學が、その傳統的な制限を抜け出て近代生活の人類學に船出したことは、たしかに近來の著しい傾向の一つであり、<sup>(3)</sup>それはそれとして意義のあることであろう。

(1) Redfield: *op. cit.*, p. 740.

(2) Cf. F. R. Kluckhohn: *The Participant-Observer Technique in Small Community*, A. J. S. vol. XLVI, no. 3, (Nov. 1940) pp. 331—43.

(3) Parsons and Barber: *op. cit.*, p. 246.

併し未開社會の研究に著しい成果が擧げられたとしても、その研究の方法を直ちに近代社會に當てはめることには、重大な疑義がある筈である。何等かの地位も、未開社會にあつては或る成員の役割であり、彼に與えられた評價であ

る。成員の殆どすべてが、かゝる評價を頌ちもつてゐる。ところが近代社會にあつては、地位は Ascribed Status であるよりもむしろ Achieved Status である。しかもその獲得には、生活のきびしい物質的諸條件が立ちはたらく。そしてこれ等の條件が孕む矛盾は、成員間の利害の對立となつて反映し、そこに當然價値の分裂をきたさざるを得ないのである。したがつて近代社會は、未開社會と同じ意味では全體でない。それは實在としての全體としてあるのでなくして、むしろ全體はこの社會に課せられた課題としての意味をもつにすぎない。

もつとも人類學者がかような點を輕率にとり扱つたとは云えぬかも知れない。というのは彼等の近代社會の分析は、先づ民俗社會 (Folk Society) のそれをもつて始つたからである。民俗社會とは農民社會 (Peasant Society) であり、あきらかに未開社會に屬するものでもなければ、また近代的な都市社會でもない、謂わば兩者の中間と見らるべき位置にある。かゝる社會の特質は、一方にその成員が『宛も部族民の如く、傳統に根ざし、一つの組織を形づくるに至つた共同の親和 (Common Understanding) によつて生活する』<sup>(1)</sup> ところにあると共に、他面においては文字も所有するし、貨幣經濟に参加しており、市場に販賣するために餘剰生産物の生産も行い、納稅義務をも負擔する。彼等農民はかようにして、彼等と都市民とを包括する廣汎な經濟的・政治的生活の枠にとり圍まれているのである。にも拘らず人類學者のとり扱う民俗社會とは、畢竟未開社會の投影に他ならないのであり、レッドフィールドも指すように、未開社會の諸特徴がいわゆる民俗社會の「理想型」として受けとられてゐる點に注意が肝要である。<sup>(2)</sup> したがつて民俗社會もかゝる理想型からの或る程度の「偏倚」であるのであり、近代的な都市社會に至つては、いよいよ偏倚としての意味をつよくたされている事情を心に銘記しておかなくてはならない。

- (1) Redfield: *op. cit.*, p. 735.  
 (2) *Id.*: *op. cit.*, p. 737.

ウォーナー等の階級問題への接近も、かゝる手續きを踏むのである。われわれはそれを検討する前に、レットフィールドに従つて、人類學者によつて摺まれた民俗社會の諸特徴を左に描いておこう。サムナーは未開社會を一つの地域に散在する小集團の社會であり、集團の大きさは生存のための鬭争の諸條件によつてきまると云つたが、民俗社會を組成する集團もそのサイズが小さく、孤立的であり、經濟的に自給自足に近い。如何なる集團の成員をとり擧げても種族や慣習において同質的である。さらに技術は幼稚であり、分業は簡單である。したがつて性別の仕事ははつきり區劃されていても、性別、年齢別の集團の一人の成員の擔當する仕事はほぼ同一である。社會行動の大部分は、いわゆる親族組織 (Kinship Organization) のもとに包攝されてあらわれる。文書は殆どまたは全く用いられず、もし用いられるとしても口傳の附屬物にすぎない。社會を構成する諸集團は密接に相互依存的であり、生活の仕方はそれに相應して相關的といふべく、互いに一致している點からして、社會の性格は著しく積分的である。社會における變動のテンポは遅く、いわば停滞的であり、統制の支配的形態はインフォーマルであり、且つ傳統的であるのを特徴とする。家族とか地域的集團とかの原初的組織が、集團において比較的大きな役割を演じる<sup>(2)</sup>。傳統が揺がしがたい權威をもつ發展のない停滞的な社會の諸特徴がこゝに凝集しているが、われわれはそれ等がいかに著しく未開社會の諸特徴を映し出しているかを見ることができらざらう。

- (1) W. G. Sumner: *Folkways, a Study of the Sociological Importance of Usages, Manners, Customs, Mores, and*

「社會的成層」について

Morals, Boston, 1907, p. 12.

(2) Redfield: op. cit., p. 737.

上述の事情は、ウォーナー等のアメリカ社會の研究、とくにその階級研究に當り、調査の對象として何故ニュー・イングランド・コミュニティとデイープ・サウス・コミュニティとが選ばれ、さらにそれぞれのコミュニティを代表するものとしてヤンキー市とオールド市とが選ばれたか、或は同じことであるが、何故曾つて調査したことのあるシカゴ近郊のシセロやウエスターン・エレクトリック會社工場の所在地たるホーソーンを對象とするアイディアが捨てられたか、をわれわれに理解させる。ヤンキー市を選んだいきさつについて、ウォーナーはこう語っている。「われわれは特に社會の種々の部分が比較的容易にその機能を擔當している充分に積分的な共同體 (Well-integrated Community) をさがし求めた。われわれは住民の普通の日常的な諸關係が混亂していたり、縫れたりしているような都市を欲しなかつた。われわれはその人口がすぐれてオールド・アメリカンであるような町を希んだ。というのは、普通近代アメリカの核心と考えられている血統——通例新しい民族集團を同化してしまう集團——が、他の民族集團の壓倒的な壓迫をうけていないとき、如何にしてその行動を組織化するかを見ることにわれわれの關心があつたからである。永い傳統をもつた共同體、即ちそこでは社會の組織が鞏固であり、社會の種々の成員の諸關係が、社會を形づくる個々人によつて正確に位置づけられ、且つ知られている共同體、がもとめられた。われわれは社會成員の均齊のとれた集團化を維持する要因よりも、分解を惹き起す要因の方が有力であるが如き急激な社會變動を経験しない集團を希望した。われわれはいくつかの民族傳統が同じように支配的である社會を希望しなかつた。何故というに、これ

は明らかなことであるが、社會全體の積分化の程度が低下し、下位集團の積分化が向上し、そして民族闘争が起りやすくなる傾きがあるためである<sup>(1)</sup>。』

(1) W. L. Warner and P. S. Lunt: *The Social Life of a Modern Community*, Yankee City Series, vol. 1, New Haven, 1946, p. 38.

かようにしてウォーナー等の調査の対象たるべきモダン・コミュニティは、むしろ民俗社會として特徴づけられている。工業都市たるシセロやホーンソンが選ばれなかつた理由は、これ等の地方の組織が解體に瀕しており、社會組織の機能が著しく阻礙されていることにあつた<sup>(1)</sup>。大體彼等の考える都市社會は、廣いアメリカでもニュー・イングランドとチャープ・サウス (South Carolina, Georgia, Florida, Alabama, Mississippi, Louisiana 等を含む地方) 以外にはもとめられぬというが、これ等の地方にあつてヤンキー市は人口一萬七千、オールド市は人口一萬の小都市であり、その周邊に農耕地帯をもつ自足生活圏であり、それ自身の自立的生活を営みうる共同體であるのである。かような小さな地域的共同體の孤立、自存及び獨立こそは、單純な未發達の社會の特徴であつたことを忘れてはならない<sup>(2)</sup>。

(1) Warner and Lunt: *op. cit.*, p. 5.

(2) J. F. Embree: *Suye Mura, a Japanese Village*, Chicago, 1944, Introduction by A. R. Radcliff-Brown, p. XIII.

上に見たような文化人類學的研究方法の近代社會への適用に對して、非難の矢が放たれたのは當然といつてよいであらう。ピアステットは第一に、この方法が文字を有する社會の研究に適用しにくいことを主張する。文字のある社會とそれのない社會との相違は、二つの社會の一切の屬性、一切の機能と關係、及びその社會組織全體に深い影響を

「社會的成層」について

及ぼすのである。したがつて人類學的接近は、その未開社會に對しての無意識の偏向から自由であることができぬがゆえに、近代社會把住の方法として不當に狹隘である。第二に文字をもたない社會はまた當然歴史をもたない。(田中 storylessness) それゆえ人類學的方法是必ず或る特定の時期における一つの社會に焦點を合せるのであり、しかもその特定の時期は常に現在である。しかるに文字ある社會の複雑な錯綜した構造は、たゞ歴史を媒介としてのみこれを擱むことが可能である。したがつて文化人類學の方法上の現在中心主義 (Temporocentrism) は、近代社會の把握に不適切である。第三は時の範疇と同様に、因果性のそれが無視される點にかゝつてゐる。文化人類學の説明は、主として個人の記録に求められ、社會全體並びにその民俗、風習、制度の分析はパースナリテイの把住を中心として、心理學的プロセスに頼り、その概念が驅使せられ、個々人の性格や氣質に歴史的出來事以上のウエイトがおかれたりすることになる。<sup>(1)</sup>

(1) R. Bierstedt: The Limitations of Anthropological Methods in Sociology, A. J. S. vol. LIV, no. 1 (Jul. 1948) pp. 23 et seq.

第四に文字をもつ社會とため社會とは、そのサイズを異にする。ところでこのサイズが、社會的諸關係の數や種類や密度を決定するのに大きな役割を演じる點に注意しなくてはならない。人口稠密な社會において各個人が演じる役割の多様性、彼が所有する地位の多數は、分業が發達せず、機能の分化が貧しい文字をもたぬ社會が、その成員に與える役割や地位の數とは比較にならない。この社會にあつては、地位の可能性は、その殆どが親族關係から來る。しかるに近代社會にあつては、かゝる親族關係は、殆どその意義を喪失している。もちろん二つの社會に住む個々人

が若干のものを共通にしており、そのうちのあるものが人間生活にとつて基礎的であることは否み得ない。だが二つの社會の異つた宿命に影響を及ぼすのは、それ等が共通にもつところのものであるよりも、むしろ共通にもたないところのものである<sup>(1)</sup>のである。

(1) Ibid.

第五に文字なき社會がつねに、他の社會から(相對的に)隔離していることが問題となる。もとより互いに隣接する社會の間に何等かの接觸の生じることにはしばしばあるが、併しこのことは決して一般的でない。ゆえに人類學者がこれに接する場合、宛もかゝる社會が隔離した單位であるかの如くにとり扱うのは、たしかに理由がある。これに反して文字をもつ社會にあつては、あらゆる種類の社會間的接觸や相互作用が、むしろこの社會の本質を形づくる。ところで社會の自存は、それだけその社會の凝集、統一並びに積分を高度にする。したがつてこの場合には、判然と「文化型相」等について語ることが可能となり、また有意義でもある。しかるに文字ある社會の場合には、同じ意味でこれ等のものを問題とすることが許されない。何とならばこゝでは、異質性が却つて常態であり、諸々の組織や制度やイデオロギーが相互に對立し、異つたしばしば相反する目的に仕えているからである。個人の偏差は極大である。規範が多く且つ相對的であることは、行動の一般的な一致を妨げ、したがつて個人の偏差がたとえ極小である場合にも、未開社會におけるが如き積分化の達成を不可能にするのである<sup>(1)</sup>。

(1) Ibid.

ピアステットの批判は、もともと近代社會分析の武器としての人類學的方法の不適切を主題とするものであるが、

「社會的成層」について

若干の誤解もあり、また文字をもたぬ社會とそれをもつ社會との兩立(Dichotomy)に囚われすぎ、したがつて批判としてなにか焦點のきつちり合わないうらみがあるが、これを機能主義に立脚するウォーナー等の立場に對する批判としてうけとるならば、大體において肯綮に當る所論であることは否みがたい。例えば第二の論點などは稍々透徹を缺く嫌いがなくはないが、これとても彼の批判が、必ずしも人類學の歴史學派に當てはまらないと見ることはできない。彼の云う Historylessness は、表面上は書かれた歴史の缺如を意味するらしいが、もしそれが、かゝる社會における出來事の反覆性、從つてまた社會の自然的性格を裏書するものと見られるとすれば、社會を組み立てる成員の同質的な行動の作用聯關を内容とする未開社會は、一層深い意味でその性格が無歴史的と考えられることにならう。かゝる社會を與えられた全體としてうけとる人類學の非歴史主義がこれに對應することは云う迄もないのである。つきつめて考えると、作用の未分化を特徴とする未開社會の研究にあつては、機能の見地はたしかに發見的假説としての役割は果すが、その深い方法的意義をあらわにすることができない。何故と云うにかゝる見地は、本來機能の分化を前提とするからである。しかるに弘通の機能主義には、却つて文化を全體としての存在において捉えるところの、したがつてそれを微分の方角と相互媒介的でない積分の方角において攬む・オルガノロギーの特徴が明らかに浮き出ているのである。<sup>(2)</sup>

(1) Cf. C. Kluckhohn: Comment on "the Limitations of Anthropological Methods in Sociology", A. J. S., vol. LIV, no. 1, p. 30.

(2) 『ヤンキー市の共同體全體及びその内部構造の種々の部分を觀察する場合、われわれの思考のうちに有機體の類推がある

ことが認められなければならない。』Warner and Lunt: op. cit., p. 12.

ところで上に見た如く、われわれはウォーナー等がアメリカ社会、特にその階級秩序探求のためにとり上げた共同体が、實は民俗社会として特徴づけられていることを知った。元來彼等の研究の狙いはアメリカ社会の正確な理解にあり、その研究のために選ばれたコミュニティは、アメリカ資本主義を貫く社会構造を究めるための実験所であつた筈である。<sup>(1)</sup>しかるにこの実験所が民俗社会的に特徴づけられているならば、実験の歸結そのものをもつて、直ちにアメリカ社会の構造を正しく映すものと見ることができであろうか。ウォーナー等の調査の結果によれば、アメリカの北部と南部とは、異つた階級秩序の様相が析出される。北部のコミュニティにおけるそれはクラス・システムであるが、南部のそれはクラス・カスト・オーダーと稱ばれるに適わしい。前者にあつては、社会的評價が社会の成員を特定の水準に定置すると共に、上下の移動やいわゆる身分違いの結婚が認められる。解放的な地位の體制である。しかるに南部にあつては、人種的な差別にもとづく上層と下層との間の通婚が禁じられ(族内婚)、それ等の間の上下の移動が許されない。こゝに明瞭にカスト制度があらわれており、そしてそれは階級秩序と交錯している。何故と云うに各々のカストのうちにあつては、地位の移動や身分違いの結婚が認められるからである。<sup>(2)</sup>

(1) Warner and Associates: Democracy in Jonesville, N. Y., 1949, pp. XIV-XV.

(2) Warner: Social Anthropology and the Modern Community, A. J. S., vol. XLVI, no. 6 (May 1941) pp. 789-90.  
Id.: American Caste and Class, A. J. S., vol. XLII, no. 2, (Sep. 1936) pp. 234-7. Davis and Gardner: Deep South, Chicago, 1947, Introduction by Warner, pp. 3-14. Warner and Lunt: The Social Life of a Modern Community,

「社会的成層」たじふ

New Haven, 1946.

われわれは彼及び彼の協力者たちの努力には敬意を吝まない。併し彼等の業績を他の諸都市またはアメリカ社會一般に當てはめようとする場合には、リンド夫妻が謙虚に述懐するように、慎重な考慮を拂う必要がある。先ず彼等の階級概念に検討が加えられなければならない。ウォーナーの把持する階級概念は、プファウツ等の分類に従うと評價階級の部類に屬する。プファウツ等は階級概念を大まかに分けて勢力階級 (Power Class) と評價階級 (Prestige Class) とに區別した。前者は經濟的・政治的意味における勢力の分割 (Distribution of Power, Machtverteilung) を手懸りとして捉えられる場合であり、後者は社會的聲望による位置づけ、或は社會的評價による階層的序列を意味する場合である。前者は經濟的・政治的地位または利害の同一を基礎として成り立つのに對して、後者は機能の分化を前提とする共通の態度の分有である。したがつて階級間の關係においても、前者の場合には對立、緊張の局面が前景にあらわれるのに對し、後者の場合には、機能の分化をつむむ全體としての作用聯關の面が浮き立つのである。<sup>(1)</sup>

(1) H. W. Pfautz and O. D. Dunkan: A Critical Evaluation of Warner's Work in Community Stratification, A. S. R., vol. 15, no. 2, (Apr. 1950) pp. 210—1.

右の區分は、大體において、ヨーロッパ社會學における階級と身分との區別に相應すると見ることがができる。併しウォーナー等の評價階級は實は身分でもないのである。身分も勢力の分割を骨子とする點で階級と異らないが、たゞそこではそのことが後景に退き、社會的に必要な諸機能の諸集團への分割の面が前景に浮き出ている。そして重要なことはかゝる分割の底に或る程度の合意が存し、分割の體制が社會的評價の凝集によつて固化しているのである。こ

の固化を支えるものが法制であるときもあるし、またそれは單なる因襲である場合もある。いずれにしても身分關係は閉鎖的であり、身分的な移動も身分間の通婚もそれ程自由でないのが特徴的である。しかるにウォーナー等の階級は開放的であり、上下の移動も上下の間の通婚も自由に許容される。にも拘らずそれは固有の意味における階級ではない。云うべくはそれは單なる地位(STATUS)に他ならないのである。アファウツ等が彼を目して階級に関する文献に無智であり、したがつて彼の階級概念は不適切であると云つてゐるのも、まんざら理由のないことではないのである。(1)

(1) Parutz and Dunham: op. cit., p. 215. 併し一般にアメリカでは、少數のドイツ系學者を除いては、ヨーロッパ、特にドイツ社會學における階級と身分との嚴密な區別は行われていない。というよりも封建社會を知らぬアメリカには、固有の意味における身分關係は存しないのである。パースンズがウェーネルの『經濟と社會』を翻譯するに當つて、身分(Stand)の譯語に難澁してゐるのは示唆的である。 Cf. M. Weber: The Theory of Social and Economic Organization, ed. T. Parsons, London, 1947, pp. 319, 393. アメリカでは、Statusに當る階級とさうして「カスト」が問題となる。カストとは身分的體制が、その根柢に種族的相違を含み極端化する場合を指すが、南部では人種的相違が一種のカスト關係を展開させてゐる。

併しウォーナー等が階級秩序の闡明を目指しながら、「地位」の探求に終つたと云われることも、彼等の人類學的パースペクティヴに立脚するその調査方法、とくに調査技術がそれと密接な關聯を有することに思い至らざるを得ないであろう。ところでさきに擧げた勢力階級と評價階級との區別を再び援用すると、前者が大量現象として、組織せられぬ集合體として捉えられ、従つて國民的規模に於いて拆出されるのに對し、後者がその性格において組織せられた集團であり、地域社會を手懸りとし、特に觀察者の個人的な生活參與によつて確かめられ得る點は特徴的である。(2) 事實地域的小社會を對象として採られた調査技術の特色の一つは、間接的面接による社會的聲望の評価(Evaluated

Participation) であり、他の一つは職業、所得源泉、家屋の型式、居住區域、家計における支出、加入する教會・團體・仲間、及び民族性、購讀する雜誌・書籍、新聞等を品定めするために案出された評價基準にもとづく個々人の得點 (Index of Status Characteristics) を使用することであるが、それ等についてもまた従つて擧げられた成果に關して、かなり手厳しく批判が行われている。<sup>(2)</sup>

(1) Pfautz and Dunkan: op. cit., p. 210.

(2) *Id.*: op. cit., pp. 206 et seqq. Centers: op. cit., pp. 226 et seqq. Hugh H. Smythe: Current Trends in American Sociology, read before the 24th Annual Meeting of the Japan Sociological Society. なお次のもとの批判の文獻であるが、それ等の掲載雜誌の一九四二—六年の分は見ることができなかつた。C. W. Mills: A. S. R. vol. 7, (Apr. 1942) pp. 263—71. K. Davis: A. J. S. vol. XLVIII, (Jan. 1943) pp. 511—3. H. M. Wolfe: Science, vol. 110, (Oct. 28, 1949) p. 456. 筆者はウォーナーとその協力者の業績を代表的なものとしてとり上げたが、アメリカにおける同じ方向の他の業績の概観のためには、つぎの文獻が便利である。C. P. Loomis and J. A. Beegle: Rural Social Systems, N. Y. 1930, pp. 340—91.

行われた批判を參酌して彼等の調査技術及び擧げられた成果を立ち入つて検討することはたしかに有益に違いないが、われわれと雖も、これ等の調査技術そのものが無意義だと云うのではない。たゞこれ等の方法や技術の使用が、當然或る程度において評價階級の析出を可能にすると同時にまた一つの限界をもつことをいうまでである。方法や技術は、この意味で調査の對象と對應するのである。したがつて人類學的・パースペクティヴを固執するの餘り、勢力階級の存在を無視してかゝつたり、またウォーナー等の場合のように、評價階級の研究が階級研究の全領域をつくすと

考えたりするのは、その階級観や階級研究の意圖を疑われても仕方ないであろう。<sup>(2)</sup> 何故なら勝義における階級こそは勢力階級なのであるし、それにアメリカにおける階級研究を刺戟した現実的な誘因が、一九二九年以降における「経済的成熟」または資本主義體制の一般的危機の意識並びにそれと關聯する階級意識の盛り上がりであつたことは否定しがたいからである。

(1) Pfantz and Duncan: op. cit., p. 211.

(2) 事實ウォーナー等の意圖は問題とされている。彼はその著書の一つで云う、著者の期するところは、男にも女にも、その社會的地位を一層よく評價し、それによつて一層よく社會的現實に適應し、その夢と希望とを可能な範圍に調整することを可能にするところの正しい道具を提供するにある、と。プファッツはこれに對し、問題は一體誰の現實かということだと云つて See. Cf. Ibid., p. 213.

もとよりわれわれも、ウォーナー及び彼と同じ方向をとる人々の評價階級析出の仕事を有意義と考える。何とならば近代社會における諸種の集團やそれ等のものの構造の底には、種々のインフォーマルな組織が沈澱し、それ等がそれ等なりに、集團や構造の潛勢力を形づくつてゐるからである。例えば近代的な労働組合等も、それがプロレタリアートの組織化であり、「向自的階級」であることが形式的に認められても、それだけではかゝる集團の存在が完全に把握されたことにならない。集團の成員たる個人人のパースナリティとか、友人關係、親分子分の關係及びその他のインフォーマルな關係等が絡み合つて、この集團の背後に存在していることを知らなくてはならない。そしてかような關係の檢出に關しては、その用意にして萬全である限り、社會人類學的な調査方法並びに技術は、かなりの効果を收

「社會的成層」について

めうるであろう。效果の如何はともかくとして、かゝる方法や技術は、この目的に相應するのである。

しかるに近代的な社會關係のうち、勢力階級の所在をつきとめようとする目的にとつては、かゝる方法や技術だけでは不十分である。近代的な社會關係は Urbanism を特徴とする。そこにあつての社會的接觸は典型的に非人格的であり、無記名であり、且つ合理的である。<sup>(1)</sup>農村や小都市にあつて、いちいちの行動や言動が人格化されており、いちいちの行動がすぐ他人の話題に上せられ、評價の對象となるような事態とは、およそ對蹠的であると云わなければならぬ。ゆえにかゝる社會關係から階級の析出を行おうとする場合には、別途の工夫をなす必要がある。われわれは既にその點についてのガイゲルの試みに觸れた。そしてかような析出の機運が、「成層」概念の創出と何か關係をもつらしいことにも、一應の見當をつけることができた。(と同時にアメリカにおけるこの概念の盛行が、それとは何の關係もないことも判然とした。たとえソロキン等の使用のうちに、ドイツ的な問題提起の餘燼が感じられるにしても。)

(1) Cf. L. Wirth: *Urbanism as a Way of Life*, A. J. S., vol. XLIV, no. 1, (Jul. 1938) pp. 1—24.

もつともアメリカにあつても、最近におけるドイツ社會學、特にウェーベル社會學の影響のもとに、勢力階級を中心とする階級理論構成の萌しは見えている<sup>(1)</sup>、また人口統計を介してソシアル・モビリティの事實をつきとめようとする試み等もなくはない。<sup>(2)</sup>殊にわれわれはセンターズの試みに興味を覚える。彼の企劃は先ず「成層」を客觀的な徵表において捉え、それと階級意識との關係を國民的規模における面接によつて得られた材料から確かめようとするのであり、<sup>(3)</sup>これをガイゲル風の行き方と對照しつゝ充分に検討するならば、われわれの問題を一層精練するのに役立つ

含みをもつのであるが、それは別の機会に俟たなければならない。

(1) 例えは Goldhamer and Shils: op. cit.

(2) 例えは E. Sibley: Some Demographic Clues to Stratification, A. S. R., (Jun. 1942) p. 322-30, now reprinted in L. Wilson and W. L. Kolb: Sociological Analysis, N. Y. 1949, pp. 642-50. わが國では曾て高瀬博士が階級の統計的觀察を試みられた。高瀬莊太郎、經濟階級構成の數量的觀察、日本社會學會編『季刊社會學』第一集。筆者も大正九年、昭和五年、昭和十五年、昭和二十二年の國勢調査の結果から暫定的な把握を試みたが、未だ充分に精鍊を加えていない。拙稿、職業統計における職業上の地位について、山口經濟學雜誌、第二卷第一號。

(3) Centers: op. cit.

附記。筆者の甚だ未熟な研究に對し並々ならぬ好意を寄せられた山口大學のスマイス博士並びにイエール大學のデーヴィ教授に感謝しなければならない。本稿起草に當り文献の借覽その他の便宜を與えられた九州大學の内藤莞爾、眞鍋隆彦、廣島 C I E 圖書館の小倉馨の諸氏、とくに山口大學の都築忠七氏にも併せて謝意を表す。——筆者。